

仲間づくりに取り組む授業づくりを求めて

—スポーツ方法学実習（サッカー）の授業実践から—

鈴木康平*

1.はじめに

ここ数年の学生・生徒・児童を取り巻く環境に変化が見られてきており、特に日常の生活から、運動に積極的に参加する者と消極的な姿勢の者に二極化する傾向がある。このことは運動に限らず、学習面においても基礎学力の差異が発生している状況が見られ、現場の教師が指導の課題に挙げる主たる要素であると言えるだろう。文部科学省のアンケート結果でも、部活動に参加する割合が60パーセントと増加したその反面で、全く参加しない者が増加していることも問題視されている。

このような若者の現状を受けて、学校現場における授業において大切なことは、一人一人が体を動かしたり、運動場面を通して仲間と積極的に関わることの喜びや楽しさをより体感することだと考える。しかしながら、現在の限られた時間数の中で（小学校・中学校・高等学校では時間数の削減、大学・短大では週1回の実施）、従来の指導課程や指導方法では目指す姿への達成度という点において、十分な環境整備がなされているとは言い難い面が存在すると考える。

また、昨今は仲間との関わり方に関して、スマートフォンなど情報機器の発達などに絡み、学生同士の直接的な心と心の向き合いが希薄になったといわれる。橋本は「スポーツの実践枠」をよりよい指導課程や仲間づくりに、「課題－役割－きまり－仲間」の位置付けを提言している¹⁾。また、永谷らは、競技的なスポーツ集団のモチベーションの持たせ方の重要性に関して言及している²⁾。共に学習指導課程の在り方と仲間づくりが密接な関係にあることがうかがわれる。

そこで本授業実践報告では、学習指導課程及び仲間づくりの2つの視点から、T大学のスポーツ健康科学部のスポーツ方法学実習における学生の変容について概観する。

2.対象のクラス、期間

保健体育教免取得を希望するクラスの1年生37人（男子26人、女子11人）で、2016年度春学期のスポーツ方法学実習（サッカー）の学生である。球技4種目から2種目を選択する際に、不得手な2種目を選択していることから、37人にサッカー経験者は存在するが、大学サッカー部員やクラブチームなどで、本格的にサッカー競技者として取り組んでいる学生は存在していない。表1にグループ分け及び、抽出メンバーの内訳を示す。

A、Bは1グループの中では、サッカーの技術戦術及び身体能力的にも優れたメンバーの2名である。サッカー部やクラブチームには所属はしていないが、幼いころにサッカーの経験が豊富である。C、Dは女子であり、サッカーの経験は皆無である。A、B、C、Dの4名を今回の抽出学生と位置付けて、6に示す声について、A、B（技術戦術に優れた男子）がC、D（サッカー未経験の女子）にかけた声に限定して、それぞれの具体例を提示する。

* 東海学園大学スポーツ健康科学部非常勤講師

表1 グループ分け及び抽出学生の内訳

グループ	1	2	3	4
男子 (26人)	○リーダー	○リーダー	○リーダー	○リーダー
	○A	○	○	○
	○B	○	○	○
	○	○	○	○
	○	○	○	○
	○	○	○	○
	○	○		
女子 (11人)	○C	○	○	○
	○D	○	○	○
		○	○	○

*○A、B、C、Dが抽出学生

3. 研究仮説

一人一人の学生が生き生きと取り組む授業づくりに迫るために、次に示す手立てを講ずれば課題達成できると考え、以下のような研究仮説を設定した。

- ・効果的な学習指導課程を実施するために、ねらいを明確にした学習指導計画を立案することで指導の手立てが明確になり、学生が主体性を持って取り組むことができる。(視点：学習指導課程)
- ・学生一人一人に集団における「声」の大切さを、技術戦術、励まし（賞賛）の両面から理解させ互いに用いることで、仲間づくりの向上を図ることができる。(視点：仲間づくり)

4. 研究の内容

- (1) 学生の実態に即した学習指導計画の立案と授業展開の工夫
- (2) 仲間づくりに不可欠な「声」の質（技術戦術及び励まし）とそのかけ方の工夫

上記の2点に関して、(1)を学習指導課程、(2)を仲間づくりにそれぞれ位置付けて、毎時間（全15時間）こだわりを持って教師と学生が互いに実践した学習内容と学生の様相を提示する。

5. 学習指導課程に関して

次の2つの面から、教師と学生が各時の学習のねらいを達成するために共通理解を図りながら取り組んだ。

- (1) 指導課程における、「事前（前時）→事中（本時）→事後（次時）」という継続した意識化を推進する。
- (2) 1時間の授業における、「課題→内容→評価」に一貫性を持たせる。

2つの課題に共通していることは、常時、学生の思考・判断の意識を認識させなければならないことで

ある。また、4の研究内容で述べたように、学生の実態に即した意識化や一貫性の保持できる環境の整備（教師の手立てやわかりやすい板書などの提示、学生が前向きに取り組める課題提示の仕方の工夫）が求められる。

具体例として、サッカーにおけるボールリフティングを習得する際に用いた提示の仕方と、「事前（前時）→事中（本時）→事後（次時）」との関連について示す。尚、ボールリフティングは最終的には個人テストの一つとして各自その実施回数にこだわり、ほぼ毎時間授業内に練習の場を設定して意識を持たせて実践した。この際に工夫したことは、「〇〇回つけるのを目標にしよう」をあえて、比喩的な表現にして、生活の中にみられる言葉を用いたことである。「友達」→「恋人」→「夫婦」とすることで、同時にボールを大切にすることも（物を人間に置き換えることで、用具の取り扱いの大切さをより認識させる）伝えている。

<事例>

前時：「サッカーボールと、お友達になろう」・・・ボールに慣れる（数回つける）



本時：「サッカーボールと、恋人になろう」・・・10回（女子は5回）ほどつけるレベルに



次時：「サッカーボールと、夫婦になろう」・・・満点（男子100回、女子30回）を目指そう

特に、サッカー部やクラブで本格的にサッカーを行っていない学生の集団であるため、回数のみで目標の提示をするよりは、生活感のある表現が効果的であると考え工夫した一例である。

さらに、(2)の「課題→内容→評価」に一貫性を持たせることに関して、教師のみならず学生自身にその一握を担わせた。4人のリーダーに、特にゲーム場面において常にチーム全員で共通のコンセプトを持たせ、ゲーム中やハーフタイムにその課題に関して振り返り（事前）、チームとしての改善点の備えを明確にし（事中）、どう実施していくかを確認（事後）させる場を設定した。その上で、教師が授業の終末におけるまとめで、各グループの出来栄（ゲームの勝敗も加味しながら）を全体場で披露し、次回への課題の提示により終了する流れを確立した。

6.仲間づくりに関して

仲間づくりにおける習熟度の一つの目安として、仲間同士の声があげられる。今回は声の変容から、サッカーの技術戦術面と声と励ましの声に分類し、第5時、第10時、第15時の3時間における推移を抽出した学生（表1参照）から分析した。

表2は、抽出グループ1におけるAおよびBから、CおよびDへのゲーム中における声を、自身がピッチ内で審判をしながら記録したものである。第5時（5月）、第10時（6月）、第15時（7月）を比較することで、声の回数や内容からその向上を推察することを目的とした。

声の質による分類は、サッカーの戦術的な要素と、励ましの要素の2つに分類しながら見ていくと、時間の経過とともに、戦術的な声から励ましの声の割合が多くなる傾向が顕著に見られた。例えば、「がんばれ」「次あるぞ」「きついでがんばっていこう」などの積極的な仲間を思う呼びかけである。また、声の回数も初期段階に比べて、徐々に増加の傾向が見られ、チームの連携にも効果を及ぼした。特に第15時の7月22日は、最後のゲームであり（2016ワールドカップとうがく大会とイベント化）、各チームの競い合いが精神的なアドバイスや励ましの声を導いたともいえるが、仲間づくりに関して一定の向上が見られたと推察できよう。

表2 抽出学生のゲームにおける声の変容 (第5時、第10時、第15時)

時 (月日)	発信者と聴者	声 の 内 容
第5時 (5月12日)	AからC	・「こっちに出せ」
	A D	・「下がってディフェンス」
	B C	・「もりあげよう」
	B C	・「大きくクリアー」
	B D	・「相手が来てるぞ」
第10時 (6月23日)	A C	・「足元へのパスじゃなくて、外のスペースに出してほしかった」
	A C	・「ラインをあげろ」
	A D	・「よし、いいパス」
	B C	・「上がっていていいよ」
	B D	・「サポートに来て」
	B D	・「タイミングが早すぎた」
第15時 (7月22日)	A C	・「切り替えを早く」
	A C	・「あと少し、がんばれ」
	A D	・「ナイスボールだった、サンキュー」
	A D	・「惜しい、次あるぞ、いこう」
	B C	・「ラスト、きついけどがんばっていこう」
	B C	・「上がれ、上がれ」
	B D	・「今の感じでいい、いけるいける」
	B D	・「最後まで頑張ってコーナーで、こぼれをねらって」

- *各時のねらい
- ・第5時「視野を広げてボールコントロールをし、サイドからの攻撃を試みよう」
 - ・第10時「スペースを有効的に用いたゲームの展開を目指して、スペースを作る動きと、スペースを使う動きを、それぞれ使い分けよう」
 - ・第15時「『2016ワールドカップとうがく大会』をみんなで盛り上げ、勝利に導こう」

7.まとめと今後の課題

本稿では、スポーツ方法学実習の授業において、学習指導課程と仲間づくりの2つの視点から、スポーツ健康科学部生の変容について概観してきた。

学習指導課程においては、「事前→事中→事後」の明確な設定が、さらに、1時間の授業の、「課題→内容→評価」一貫性がそれぞれ不可欠であることが示されたと言える。そのために今後は、より念密な学生の実態観察・理解が求められ、教師の先見性を踏まえた環境整備やさらなる創意工夫が必要であると考えられる。

仲間づくりに関しては、「声」に着目して分析した結果、学生への提示の仕方を工夫することで、個に応じた指導の手立てが明確になり、学生が自発的に取り組める様相が発生することが示された。今後の課題としては、お互いを高めるためのより具体的な手立てを、教師だけではなく学生の立場から考え全体の場で提案して、学生の主体的な活動が仲間同士の中で、大きなうねりを発生していくような集団づくりを構築することと考えている。

引用・参考文献

- 1) 橋本正一. 体育授業課程の研究：1-4. 黎明書房. 1984.
- 2) 永谷稔. 競技スポーツ集団における成員の意欲に関する研究. 東海保健体育科学20：35-46. 1998.